日本語会話のスピーチレベル¹を扱う 研究の概観

宮武 かおり

東京外国語大学大学院博士後期課程

要旨

これまで行われてきた日本語のスピーチレベルを扱う研究は、使用する用語の定義やスピーチレベルの分類方法が研究ごとで異なっており、その整理を行うことが必要である。また、これまでスピーチレベルの使用実態解明のためにどのようなデータが分析されてきたかを整理する必要がある。本稿は、日本語会話におけるスピーチレベルを取り上げている先行研究を概観し、研究ごとの用語の定義・分類・分析方法を比較し、それぞれの特徴について検討した上で、今後のスピーチレベル研究にはどのような視点が必要かを考察する。結果、今後の日本語会話のスピーチレベル研究における課題として、用語の整理と明確な定義、スピーチレベルの分類の精緻化、研究目的に適したデータの選択、より多様なデータにおけるスピーチレベルの解明（具体的には、3者以上が参加する会話、親疎関係の要因について解明する研究の必要性）の4点を挙げた。

1. はじめに

日本語学習者にとって、日本語のスピーチレベル操作についての理解は難しく、上級・超級話者であってもその運用能力に不安を感じている学習者は少なくないようである。これは、スピーチレベル操作には形式上正しい敬語を使用することだけでなく、場面に応じた敬語の使用・不使用の操作が必要であり、その基準が動的で複雑なためである。しかし、日本語教育で敬語の使用について取り上げる際には、上下や親疎といった相手との関係性を反映した使用について説明することは多いが、実際の操作について扱うことはあまり多くない。谷口（2004a）の日本語教材でスピーチレベル・シフトがどのように取り上げられているかを分析した研究でも、実際の会話に見られるような敬体・常体のスピーチレベル・シフトが扱われている教材は

1 本稿では、言語形式の丁寧度を扱う用語として、「スピーチレベル」を使用する。類似した事項を扱う用語として、「スピーチスタイル」、「待遇レベル」など様々なものがあるが、それらについての整理は本稿2節で論じる。

非常に少ない上に、その説明も不十分であるという指摘がされている。「敬語の使用／不使用」、または「敬体／常体の選択」といったスピーチレベル選択はポライトネスとも密接に関わっているため、日本語教育場で正確な情報を提示していくことが必要だと考えられる。そのためには、実際の会話におけるスピーチレベル操作がどのように行われているのかを解明することが必須である。

日本語会話のスピーチレベルについて分析する研究は、これまでも様々な観点から行われており、その中で様々な知見が示されてきた。しかし、日本語会話のスピーチレベルに関する研究は、同一の基準によってスピーチレベルを分類し、分析しているわけではない。スピーチレベルを決定する要素として扱われる言語形式の範囲や、その扱いは、研究によって異なっている。また、「スピーチレベル」という用語についても注意が必要である。言語形式の丁寧度を表す用語として、「スピーチレベル」のほかに、「スピーチスタイル」、「待遇レベル」などの用語も使用されている。また、どのようなデータを研究対象としているかも研究により様々である。これまでの研究において、スピーチレベルがどのように扱われ研究されてきたか、整理する必要がある。

本稿では、日本語会話のスピーチレベルについて扱った先行研究について概観する。「日本語のスピーチレベルを扱う研究」として本稿で取り上げたのは、日本語による準自然会話（被験者の協力を得て収録したある程度自由な会話）やドラマのシナリオやインタビュー・対談番組をデータとして、その中に現れるスピーチレベルを扱った研究である。先行研究について、用語の選択と定義、スピーチレベルの分類方法、データの種類の、3つの観点から概観し、日本語会話のスピーチレベルの研究において、今後どのようなことが課題となるかを考察する。

2. 用語の選択と定義

まず、言語形式の丁寧度を指す用語として、どのような用語が使用され、それがどう定義されているかについてまとめる。それぞれの用語が示す現象は同一なのか、もし異なっているとすればどのように異なるのかを考察する。用語の整理をする本節においては、できるだけ多くの用語・定義について扱うため、談話に出現するスピーチレベルの分析を行った研究の他に、教科書分析（谷口 2004a）や、意識調査（岡部・蒲谷 2000、佐藤・福島 1998）の方法をとった研究も調査対象に含めた。

また、日本語のスピーチレベルに関する研究は、海外においても英語を使用して発表されている。本節で、英語で発表されたスピーチレベルを扱う研究における用語の選択・定義についても触れる。

2.1. 用語の選択

まず、先行研究において、それぞれの用語が使用されているかを表1²に示す。英語で発表された研究についても、「スピーチレベル」と“speech level”など、そのまま対応している使用が見られた場合には、表に含めた。

表1で示したように、筆者が概観した先行研究の中では、言語形式の丁寧度について、「スピーチレベル」、「スピーチスタイル」、「待遇レベル」、「敬語レベル」、「文体シフト」、「言語形式、文のスタイル」、「スタイル」、「表現スタイル」という8種類の用語が使用されている。「用語」2行目括弧内の「スピーチレベルシフト」、「スピーチスタイルシフト」等の用語は、当該の談話において言語形式の丁寧度が変化する現象について表す用語である。この「シフト」については、研究がとる分析の方法によっては扱っていない場合もある。下線をつけて示したのは、本節で挙げた用語を同一論文内で複数使用していた研究である。例えば、前田(1999)は、「スピーチレベル」という用語で言語形式の丁寧度を分類していたが、「スタイル」という用語も他の事象を扱うものとして使用している。このように複数の用語を異なる意味で使用している研究は、用語それぞれがどのような関係にあるかを考察する際に役立つと考えられる。

表1 スピーチレベルに関連する用語の使用

用語	研究(発表年順)
スピーチレベル (スピーチレベル・シフト)	Ikuta (1983) 足立 (1995) <u>大浜・鈴木・多田 (1998)</u> <u>佐藤・福島 (1998)</u> 宇佐美 (1998, 2001) <u>前田 (1999)</u> 岡部・蒲谷 (2000) Usami (2002) 金 (2002) 岡野 (2000) 岡部 (2003) 陳 (2003, 2004) 内藤 (2003) 上仲 (2005, 2007) 谷口 (2004a, 2004b) 上仲 (2005) 森 (2005) 林 (2005) 鄭 (2004) 橋本 (2006) 日高・伊藤 (2007) 宮武 (2007a, 2007b)
スピーチスタイル (スピーチスタイル・シフト)	横須賀 (1999) 岡野 (2000) 岡部 (2003) 伊集院 (2004) 大津 (2004, 2007) 申 (2007)
待遇レベル (待遇レベル・シフト)	三牧 (1989, 1993, 1996, 2002) <u>佐藤・福島 (1998)</u> 江口 (1999)
敬語レベル	生田・井出 (1983)
文体シフト	岡本 (1997)
言語形式、文のスタイル	山口 (2002)
スタイル (スタイル切り替え)	李 (2003) <u>前田 (1999)</u>
表現スタイル (スタイル・シフト)	<u>大浜・鈴木・多田 (1998)</u> 永井 (2007)

2 「スピーチレベル」と「スピーチ・レベル」など、区切りに表記の違いがあるものも認められたが、本稿ではその差については扱わない。

これについては後述する。

2.2. 用語の定義

まず、それぞれの用語がどのように定義されているか、特徴をまとめる。研究例が複数ある「スピーチレベル」, 「スピーチスタイル」, 「待遇レベル」については、その定義や他の用語との違いを詳しく考察する。

2.2.1. スピーチレベル (スピーチレベル・シフト)

用語「スピーチレベル」は、本稿で参照した論文の中で最も多く使用されていた。谷口 (2004a, 2004b) はスピーチレベルを、「ある談話において選択される文末 (発話末) の文体 (「ですます体」・「非ですます体」) や敬語 (いわゆる尊敬語・謙讓語)、終助詞 (「ね」, 「よ」, 「わ」, など) の使用・不使用による丁寧さのレベル (谷口 2004a: 49)」と定義している。明示的な定義のない研究もある中、この定義は「スピーチレベル」の範疇について具体的かつ網羅的に示している。スピーチレベルが「敬体 (丁寧体・デスマス体)」と「常体 (普通体・ダ体)」という文末形式の種類を扱うという点では、どの研究においても一致している。研究によって差があるのは文末形式以外についての扱いで、文末形式の丁寧度の他に、尊敬語・謙讓語という狭義の敬語の使用不使用を観点に入れるもの (足立 1995, 宇佐美 1998, 2001 など)、美化語・軽卑語などを観点に入れるもの (岡部 2003 など)、「ね」・「よ」などの終助詞が付加されているかどうかを観点に含めるもの (上仲 2005 など) などがある。

2.2.2. スピーチスタイル (スピーチスタイル・シフト)

用語「スピーチスタイル」は、横須賀 (1999), 岡野 (2000), 伊集院 (2004) などの研究で使用されていた。その定義については、横須賀 (1999), 伊集院 (2004) ではあまり明示されていない。岡野 (2000) には、スピーチスタイルの説明として、「デス・マス体やダ体／くだけた話体 (岡野 2000: 1)」という記述がある。岡野 (2000) の「くだけた話体」とは、終助詞を含むもののことを指す。この定義に従うと、岡野 (2000) の「スピーチスタイル」は、本稿 2.2.1. 節で挙げた「スピーチレベル」とほぼ同義だと考えられる。さらに、岡野 (2000) では「スピーチレベル」を「スピーチスタイル」ととくに区別せずに使用している部分も見られた。横須賀 (1999), 伊集院 (2004) もスピーチスタイルとして、尊敬語・謙讓語、敬体／常体の区別について扱っており、「スピーチレベル」と極めて近い意味で使用されていることが読み取れる。

しかし、「スピーチスタイル」と「スピーチレベル」が区別して使用されている例も見られる。「スピーチスタイル」と「スピーチレベル」の差について示唆する記述が、岡部 (2003) に見られる。岡部 (2003) は、丁寧度のコーディングにおいては用語「スピーチレベル」を使用しているが、「スピーチスタイル」という用語をそれとは異なる意味で使用している。岡部

(2003) に、「どの程度の丁寧さで話すか、あるいは女性／男性らしく話すか、高校生／子供らしく話すかなどのスピーチスタイルの選択は、対人関係を調節する重要な機能を果たす(岡部 2003: 23)」、「スピーチスタイルの中でも特にスピーチレベルの変化に注目し…(岡部 2003: 24)」という記述がある。また、大津(2004, 2007)は、用語「スピーチスタイル」、「スタイルシフト」を使用して友人間会話における冗談で見られる話し方の変化について扱っているが、そこで扱われる現象には、敬体へのシフトだけではなく、老人や幼児のような話し方へのシフトなども含まれている。ここから考察すると、岡部(2003)や大津(2007)においては、敬体・常体といった敬語体系をもとにした言語形式の丁寧度は、「スピーチスタイル」を構成する一要素であり、「スピーチスタイル」は「～らしく話す」など丁寧度とは違う次元についても扱う用語である可能性が示唆される。

2.2.3. 待遇レベル(待遇レベルシフト)

用語「待遇レベル」は、三牧(1989, 1993, 1996, 2002)と江口(1999)で中心的に使用されている。江口(1999)は三牧(1989, 1993)の枠組みを使用したものである。三牧の一連の研究において「待遇レベル」はどのように定義されているかを整理する。三牧の研究において、「談話の中で選択・使用される待遇表現のレベルを「待遇レベル」と呼ぶ。待遇レベルは敬語、方言、音便、終助詞などの使用・不使用、文末文体などに表現されると考える。(三牧 1993: 39)」、また、「選択された待遇表現の待遇度(三牧 1996: 437)」という定義がされている。分析においては、ですます体や終助詞を基準にした分類を行っており、その点では他の用語と類似しているが、三牧(1996)では「待遇度」という用語を使い、相手を能動的に待遇する機能が強調されている。また、「待遇レベル管理」の定義として「待遇レベルに関するコントロール(三牧 1997)」としている点からも話者の能動的な選択の意味合いが含まれていると考えられる。

「待遇レベル」という用語は、佐藤・福島(1998)においても使用されている。ただし、佐藤・福島(1998)は、丁寧体・普通体の区別を指す用語としては「スピーチレベル」を使用しており、「自然な度合い」や「適切さ」の印象調査の際に「丁寧度」というよりはむしろ認識に関わるものとして「待遇レベル」という用語を使用している。

以上の点から、「待遇レベル」は、三牧(1989, 1993, 1996, 2002)と江口(1999)において、他の用語と類似した意味で使用されているが、三牧(1993, 1996)の定義や、佐藤・福島(1998)の使用方法から考察して、話者の能動的な「待遇する」意識や、聞き手や観察者に与える効果についても指す用語だと考えられる。

2.2.4. その他の用語

上記3つの用語の他に、「敬語レベル」(生田, 井出 1983), 「文体シフト」(岡本 1997), 「言語形式, 文のスタイル」(山口 2002), 「スタイル」(李 2003), 「表現スタイル」(永井

2007) が、敬体・常体など言語形式から判断される丁寧度を指す意味で使用されている。これらは定義が明確にされていないものも多く、他の用語との差異を十分に検討することは困難である。

用語の選択について、用語間の関係を整理する上で有用と考えられる言及があったものを以下に挙げる。

前田 (1999) は、「スピーチレベル」を用語として採用しているが、「スタイル」も使用しており、「発話末のスピーチレベルの違いが話者のスタイルを構成する要素のひとつとして存在していることがうかがわれる (前田 1999: 35, 36)」と述べている。この記述からは、「スピーチレベル」が「スタイル」に含まれる、という関係が示唆されている。永井 (2007) は、「表現スタイル」という用語を使用しているが、丁寧体・普通体のシフトは「スピーチレベル・シフト」などと呼ばれることを述べてから、「本稿では、丁寧体・普通体および標準語・方言のシフトを同時に扱うことから、表現スタイルのシフトという意味でスタイルシフトという用語を使うこととする (永井 2007: 83)」と述べている。永井 (2007) から、「表現スタイル」は「スピーチレベル・シフト」、「待遇レベル・シフト」などの用語より広い範囲を扱うことが示唆される。

2. 2. 5. 英語で発表された文献における用語の使用

次に、英語で発表された文献において、どのような用語が使用されているかを論じる。Ikuta (1983), Usami (2002) は、談話に現れる敬語体系をもとにした言語形式の分析を行い、用語として Speech level, Speech level shifts を使用している。これは、日本語文献における「スピーチレベル」に対応した用法といえる。

Cook (1998, 2006) と Okamoto (1999) も敬語体系をもとにした言語形式の分析を行っているが、ここで特徴的なのは、その現象に「スピーチレベル」や「スピーチスタイル」などの特別な用語を当てていないことである。Cook (1998) は “Masu and plain form”, Okamoto (1999) は “(the use of) honorifics” という表現を使って、この現象を指している。Cook (2006) は、introduction においては、“Speech-style shifts” を使用しているが、具体的な分析においては “Masu and plain form” を使用している。日本語を理解する読者のみに向けられたものでないため、用語の使用がより説明的になっていると考えられる。Okamoto (1999) は結論において、敬語で表されるポライトネスについて、“It is a speaker’s speech-style strategy used in a specific social and historical context. 「(敬語で表されるポライトネスは) 特定の社会的歴史的な文脈で用いられるスピーチスタイルのストラテジーである。」 (Okamoto 1999: 70 筆者訳)” と述べており、この部分で Speech style という用語が使われているが、これは “(the use of) honorifics” と等しい意味では使われていないと考えられる。Okamoto は、Siegal and Okamoto (2003) で、ジェンダーに関わる言語形式について論じているが、ここでも “speech style” という用語を使用している。“Speech style”

の使われ方は、敬語体系をもとにした言語形式選択のみを扱うのではなく、より広い意味で使用されている。日本語の研究と類似した傾向があるようである。

2.2.6. それぞれの用語の違いについてのまとめ

ここまで、「敬体／常体」、「丁寧体／普通体」、「ですます体／非ですます体」など言語形式の丁寧度を扱う用語の相互関係について、個々の用語の定義や扱われ方を述べてきた。筆者の考察をまとめると、以下ようになる。

- ・「スピーチスタイル／スタイル／表現スタイル」：「スタイル」を含む用語は、標準語と方言の区別や、「～らしく話す」など、丁寧度とは別の次元についても意味に含むことがある。同一研究内で「スピーチレベル」という用語が使用される場合は、「スピーチレベル」は、「スピーチスタイル／表現スタイル」を構成する要素の1つとして扱われている。このことから、「スタイル」を含む用語は、他の用語より扱う範囲が広く、限定されていないのではないか。
- ・「待遇レベル」：「どのように待遇するか」というニュアンスを含む。「効果の認識」という意味で使用されることもあり、単なる形式ではなく、機能や効果についても意味に含んでいるのではないか。

以上の考察から、①言語形式の丁寧度のみを指す用語で意味が限定されていること、②機能や効果を意味に含まず、言語形式のニュートラルな関係を示していること、を理由に、言語形式の丁寧度を指す用語としては、「スピーチレベル」がもっとも汎用性があると筆者は考える。そこで、本稿で使用する用語として、「スピーチレベル」を選択する。以下では、先行研究で選択されている用語に関わらず、言語形式の丁寧度を指す用語として、統一して「スピーチレベル」を使用する。

3. スピーチレベルの分類方法

2節で、言語形式の丁寧度を指す用語について整理したが、スピーチレベルは、その分類方法も多様である。スピーチレベルの分類には先行研究間でどのような違いがあるかをまとめ、今後のスピーチレベルを扱う研究において、必要となる観点は何かを考察する。

3.1. いわゆる敬体／常体の分類

スピーチレベル分類の核となるのは、いわゆる敬体／常体などの文末形式による分類である。敬体は「です・ます体」、「丁寧体」、常体は「だ（・である）体」、「普通体」、「非です・ます体」などとも呼ばれる。文末に「です」「ます」が付くかどうかを観点にした分類は、本稿で概観した先行研究のすべてが行っている。敬体・常体の区別において、先行研究間で大きな差が表れているのは、敬体とも常体とも判断されない発話の分類である。敬体・常体の2分類を採用しているのは、足立（1995）、三牧（2002）などである。これらは、「です・ます体」か

「非です・ます体」かを区別しており、「非です・ます体」は「です」「ます」を含まないことを基準にしており、常体のマーカーを設定していない。一方、宇佐美（1998, 2001）は、中途終了型発話や応答詞のみの発話を、敬体・常体どちらのマーカーもない発話 No-Marker として分類している。金（2002）と、林（2005）、宮武（2007a, 2007b）もこの分類に従っている。伊集院（2004）は、発話を実質的発話と相槌的発話（応答詞が含まれる）に分けた上で、実質的発話を敬体・常体・中途終了型の3つに分類している。申（2007）もこの分類に従っている。

宇佐美（1998, 2001）、伊集院（2004）らの分類は、常体にもマーカーを設定している点、敬体でも常体でもない分類（No-Marker と中途終了型）を設けている点で足立（1995）、三牧（2002）らと異なる。No-marker や中途終了型を設定することの意義は、林（2005）の研究から読み取れる。林（2005）はデータに出現した No-marker を、当該発話の構造（一単語のみの発話／文の構造を成した発話）、及び、言い淀みの有無の観点から更に分類して、その母語話者と学習者の使用傾向を比較した。その結果、学習者は母語話者に比べ、目上に対する言い淀みのない一単語のみの発話が多いことを示し、このような簡略化した質問・答えを多用することは失礼になる可能性が高いことを指摘した。このように、No-marker や中途終了型といった敬体でも常体でもない発話も、相手への待遇に関わることが示されているため、これを分類することは意義があると考えられる。

3.2. 語彙レベルの分類

文末以外に現れる、尊敬語・謙譲語といった狭義の敬語、軽卑語をスピーチレベルとして扱う研究がある。宇佐美（2001）は、尊敬語・謙譲語を分類の観点に含むことで「いらっしゃいますか」、「いらっしゃる?」、「行くんですか」、「行くの?」の言語形式を区別することができることを示した。また、「いらっしゃる?」と「行くんですか」は、どちらが丁寧かという判断が難しい点、「いらっしゃる?」は目上に使いにくいなど使用の制約がある点などを述べて、尊敬語・謙譲語は、言語形式の丁寧度に関わる上にその役割は「です」「ます」とは異なることを指摘している。このような現象を捉えるために、尊敬語・謙譲語などの語彙レベルの丁寧度も分類基準に含むことが必要だと考えられる。同じく語彙レベルの丁寧度を示す軽卑語は岡部（2003）、上仲（2005, 2007）などの分類で含まれているが、何を軽卑語とするかの記述はあまり明確ではない。量的分析に反映されるほど精緻化された分類は、管見の限りないようである。しかし、軽卑語も言語形式の丁寧度に関わることが考えられるため、今後分類の精緻化を目指す必要があるだろう。

3.3. 終助詞の付加

スピーチレベルの分類に、「ね」「よ」などの終助詞付加を観点に含める研究がある（三牧 2002, 伊集院 2004 など）。佐藤・福島（1998）は、終助詞「ね」「よ」を観点に含めて、日本語学習者と母語話者のスピーチレベルの待遇レベル認識の違いについて調査した。その結果、

「ね」「よ」が付加される発話末表現は学習者と母語話者で待遇レベルの認識に差があり、「ね」「よ」の付加は、母語話者には待遇レベルが低いと認識されることを指摘している。橋本(2006)は、「ね」「よ」の付加と中途終了型発話を「中間的なスピーチレベル」とし、この「中間的スピーチレベル」は、「よそよそしい」または「なれなれしい」といった丁寧体と普通体の負の効果を和らげる効果を持っていると述べている。このように、終助詞の付加は、会話参加者に与える丁寧度の認識に深く関わっていると見える。とくに、佐藤・福島(1998)は、待遇レベル認識そのものについての調査であり、この調査結果からの示唆は、大きな意味を持つと考えられる。

3.4. スピーチレベル分類の観点

3.1. から3.3で述べたように、スピーチレベルの分類方法には様々な観点があり、分類方法も研究によって異なる。研究によって扱いが異なる点として、①敬体・常体と区別したNo-markerの分類、②語彙レベル(狭義の敬語と軽卑語)の分類、③終助詞付加の有無の分類、の3つを挙げた。これら3つの点は、言語形式から認識される丁寧度の印象に関わっていることが、先行研究から示されている。今後の研究においても重要な観点と考えられる。

スピーチレベルの分類について、留意すべき点が三牧(1996)で指摘されている。三牧は、スピーチレベルに関する複数の研究を発表しているが、その分類項目を、三牧(1989)では4分類、三牧(1993)では9分類、三牧(1996)では3分類と変えている。その中で最も細分化した分類を採用している三牧(1993)は、語彙レベルと文法的文体レベル(文末)の2つの観点の分類を組み合わせしており、3分類を採用した三牧(1996)は語彙レベルの分類を行っていない。このような分類項目の変更について、三牧(1996)は、「待遇レベルの変化を量的に捉えるためには、細分化した表示法では待遇レベル・シフトの傾向が把握しにくくなる(三牧1996: 437)」と述べている。三牧(1996)の指摘のように、スピーチレベルの分類は細分化すればするほど量的な傾向把握が難しくなる。分析の目的に合わせて分類方法を調整することも考える必要がある。

4. スピーチレベルの研究で扱われるデータ

次に、以上で参照した談話におけるスピーチレベルを扱った研究においてどのようなデータが扱われているかについて検討する。

4.1. データの種類

まず、データがどのような方法で入手されたものか、データの種類について整理する。本稿で概観した先行研究で使用されたデータを、次の①から⑦に分類した。それぞれの特徴について述べる。

①ドラマ・映画のシナリオ：上仲（2005）、日高・伊藤（2007）

ドラマや映画のシナリオをデータとする利点としては、まず、データの入手しやすさが挙げられる。映像があり、文脈情報や話者の表情も観察可能であるため、データとして分析するのに適している。また、とくにヒットした作品においては、多くの視聴者が共感を覚えたことを考えるとその会話から受ける印象が「自然」であったことが予想されるため、1つのモデルとして、有用だと考えられる。

しかし、このデータが実際の話者によって発話されたものではないことは、やはり留意する必要がある。ドラマや映画などの台詞には、登場人物の「役割」が反映されている。終助詞「わ」「よ」を使う女性語など、実際に使用されることは稀な表現も「役割語」として使用されていることがある。このような「役割」がスピーチレベル選択にも影響していないか、検証してみる必要がある。

②講演：谷口（2004b）

講演の談話データは、話す内容はある程度事前に決められているが、講演中の講演者による自由な発話が観察できる。この点で、ドラマのシナリオに比べて、発話が実際の使用に近いといえる。このデータで最も特徴的なのは、1人の話者による一方向のモノログであることである。講演中、聴衆の表情・反応をある程度見ることはできるものの、基本的には講演者が1人で談話を進めている。このデータをスピーチレベルの分析に使用することを考えると、ある程度長いモノログで講演者は順序立てて話す必要があることから、談話の展開機能について観察しやすいと予想される。研究目的によっては、有用なデータである。しかし、相手の使用するスピーチレベルを反映してのスピーチレベル選択など、相互作用的な動きについては分析できない。

③インタビューのテレビ番組：足立（1995）、三牧（1993, 1996）

インタビュー番組の談話は、ドラマのシナリオと同様、入手しやすい点が利点である。インタビュー参加者同士の相互作用もある程度自由に行われると予想される。しかし、テレビ番組として公開することを目的にしているため、話す内容は事前にある程度決まっていると考えられる。また、どの程度まで話す内容を決めてから撮影をするのかは視聴者には検証しようがなく、どの程度の自由度を持ってインタビューが行われているのか、自然さについては疑問が残る。

④公開を目的にした対談：佐藤・福島（1998）、三牧（1997）

ここでいう対談は、映像が放送される、本になるなど、公開を目的にした対談のことである。このデータも入手しやすいことが長所といえる。このデータは、話し手・聞き手が決まっていない点で「インタビュー番組」とは異なるが、話す内容が事前にどの程度決まっていたのか検

証できない点では類似している。

⑤談話完成テストやロールプレイ：山口（2002）

談話完成テストやロールプレイなど、仮想の設定のもと会話を行う、または予想される発話を書いて回答する方法がある。山口（2002）は、記述式の談話完成テストをデータとして使用している。これらの方法は、研究対象となる発話を引き出しやすいこと、話題などを統一できることが利点となる。しかし、現実ではない設定のもとで表出される発話であるため、実生活の言語行動をそのまま反映したデータとは言いがたい点が問題点である。

⑥準自然会話（被験者の協力を得て収録したある程度自由な会話）：宇佐美（1998, 2001）、伊集院（2004）、三牧（2002）など

ここでいう「準自然会話」データは、複数人の相互作用があり、かつ会話の展開が最初には決められていないものである。そのため、取材としてのインタビュー（前田 1999）もここに含める。被験者に録音や撮影を依頼するため、また、研究によっては最初に話題などを指定するため、完全に自然な会話とは言えないが、会話開始後の話す内容や話し方などの展開は話者自身の判断にかかっている。そのため、実際の相互作用について観察することが可能だと考えられる。

スピーチレベルの使用に関しては、上下関係や親疎関係をもとにした敬語の使い分けのように、誰にどのように話すかの規範的な意識が存在している。しかし、実際の使用には、そのような規範的・固定的なスピーチレベル選択だけでなく、会話の途中で起こるスピーチレベル・シフトなどの動的な現象が観察される。談話におけるスピーチレベルの研究の意義は、実際の使用で見られるこの動的な側面の解明にある。このような側面の解明のためには、談話の展開を事前に定めずに収録した、準自然会話データが最も適していると考えられる。しかし、準自然会話をデータとする場合に課題となるのは、データ収集や文字化に相当の時間と労力を要することである。

ここまでで述べたそれぞれのデータの特徴について表 2 でまとめる。

表2 スピーチレベルを扱う研究で使用されたデータの種類と特徴

データの種類	特長	留意点
①ドラマ・映画のシナリオ	<ul style="list-style-type: none"> データの入手が容易 映像から文脈情報が観察可能 多くの視聴者にとって違和感のない発話である 	<ul style="list-style-type: none"> 実際の使用ではなく「役割語」を反映したものの可能性がある
②講演	<ul style="list-style-type: none"> 講演者によるある程度自由な発話が観察可能 整理されたモノローグ発話で談話の構成 展開について観察しやすい 公に向けての発話である点が特徴的 	<ul style="list-style-type: none"> 事前に内容は決められているため、自由な展開は観察できない 話者間の相互作用は観察できない
③インタビューのテレビ番組	<ul style="list-style-type: none"> データの入手が容易 話者間の相互作用が観察可能 インタビュアー インタビュイーの役割が固定されている点が特徴的 	<ul style="list-style-type: none"> 事前にどの程度展開が決められていたのかなど、設定について不明な点が多い 実際の使用を反映したものであるかは保証できない
④公開を目的にした対談	<ul style="list-style-type: none"> データの入手が容易 話者間の相互作用が観察可能 インタビュアー・インタビュイーの役割がなく、対等な相互作用が観察可能 	<ul style="list-style-type: none"> 事前にどの程度展開が決められていたのかなど、設定について不明な点が多い 実際の使用を反映したものであるかは保証できない
⑤談話完成テスト・ロールプレイ	<ul style="list-style-type: none"> 研究対象となる発話を引き出しやすい 条件統制が容易 	<ul style="list-style-type: none"> 仮想の設定に基づくもので、実際の使用を反映しているか不明
⑥準自然会話	<ul style="list-style-type: none"> 実際の相互作用が観察可能 自然さについては他のデータより優れている 	<ul style="list-style-type: none"> データ収集に時間と労力を要する

4.2. 準自然会話をデータとする研究

4.1.で述べたように、データの入手に関しては課題を残すものの、実際の相互作用を分析する目的に最も適したデータは、準自然会話だと考えられる。準自然会話を収集してデータとした研究がこれまでも行われている。

次に、準自然会話をデータとした研究について、その観点や実験計画についてまとめ、先行研究にはどのような問題点があるかを考察する。

4.2.1. 会話参加者の人数について

準自然会話をデータとするスピーチレベルの研究は、これまでに様々な観点から行われてき

た。とくに多く研究されているのは、被験者の親疎関係や年齢など、特定の条件を設定した2者間の会話である。4.2.2.節で挙げる研究はすべて2者間会話をデータとしたもので、本稿で取り上げた準自然会話を扱う研究のほとんどが当てはまる。それに対して、3者以上の参加者がいる談話におけるスピーチレベルの研究は、看護師同士の「申し送り」会話(永井2007)、教師の授業場面の発話(横須賀1999)があるが、他にはあまり見られない。

永井(2007)は、報告者が参加者に向かって一方的に話す「独話的部分」においては丁寧体が使われ、他の参加者が発言してインタラクティブな「対話的部分」においては普通体が使われる現象を報告している。横須賀(1999)は、教師の発話がクラス全体に向けられるものか、個人に向けられるものかによって、使用スピーチレベルが変化する現象があることを示している。このように、特定の相手との個人的なインタラクティブな会話と、1人から全体に向けての発話で使用されるスピーチレベルが変化する事が示されている。

2者間会話とは異なる機能をもってスピーチレベルが使用されていると考えられるため、3者以上の参加者がいる会話も、今後のスピーチレベルの研究において注目されるべきデータと言えるだろう。

次から、最も多くの研究がなされてきた特定の条件を設定した2者間の会話をデータとする先行研究についてまとめる。

4.2.2. 分析の観点について

まず、会話参加者同士の関係がどのように設定されているかという観点から先行研究をまとめる。会話の場面設定では、初対面2者間の会話を分析するものが非常に多い(宇佐美1998, 2001, 金2002, 三牧2002, 陳2003, 2004, 伊集院2004, 林2005など)。初対面場面の会話は、会話参加者同士の上下関係という観点からの分析を行うものが多い。2者間の学年・年齢による上下関係を設定して、会話相手によるスピーチレベルの使い分けを分析するものがある。三牧(2002)は、同学年ペアと異学年ペアの会話をデータとし、話者間の上下関係がスピーチレベル選択にどのように影響するかを分析している。宇佐美(1998, 2001)は、日本語母語話者同士の初対面会話を、目上・同等・目下と同性・異性という2つの要因によって比較を行った。宇佐美(1998, 2001)の実験計画に従い、韓国人日本語学習者と母語話者の接触場面(金2002)、台湾の日本語学習者と母語話者の接触場面(林2005)を収録して、日本語学習者の上下関係に応じたスピーチレベル使用の母語話者との比較を行ったものもある。次に、会話参加者同士の親疎関係に注目して、会話を分析したものがある(大浜1998, 森2005)。大浜(1998)は、3人の大学生(男性1人, 女性2人, 女性2人は友人で, 男性は残りの女性被験者2人と初対面)を被験者として、性別・親しさの度合いが異なる会話を分析した。森(2005)は、母語話者・中国人日本語学習者をベース話者として、同性で「年上・親」, 「年下・疎」の相手との会話を分析した。

ここで注目されるのは、親疎関係を扱う研究が、上下関係を扱う研究に比べると非常に少な

いことである。また、親疎関係を扱うものとして挙げた大浜（1998）と森（2005）は、親疎関係だけではなく上下関係も扱っている。男女、年上／年下といった要因について条件統制がされていないため、親疎の影響が見えにくいことが予想される。親疎関係の要因について解明する研究は、ここまであまり注目されてこなかったといえるが、時間が経つにつれて変化する親疎関係を反映したスピーチレベルの選択は、相手との友好的な関係の醸成のために必要不可欠だと考えられる。この操作について不安を感じ、指針を必要としている日本語学習者も多いはずである。また、親しい相手との会話においてどのようなスピーチレベルが使用されるのかを明らかにしている研究は少なく、相手と親しい関係を築きたいと考える学習者のニーズに応えられる知見はまだ十分には示されていない。筆者は、宮武（2007a, 2007b）において、すでに関係が「親」である友人間の会話をデータとして、そこで使用されるスピーチレベルについて分析を行った。しかし、「疎」の関係の会話については扱っておらず、親・疎両方の要因について解明するには至っていない。

次に、ある話者やグループを対象を絞ってそのスピーチレベル使用について解明しようとするものと、話者やグループを比較しようとするもの、という2つのアプローチについて論じる。宇佐美（1998, 2001）や三牧（2002）は、母語話者を被験者とし、そのスピーチレベル使用について解明している。一方、先に述べたように、金（2002）と林（2005）は、宇佐美（1998, 2001）の実験計画に従い、韓国人日本語学習者と母語話者の接触場面（金 2002）、台湾の日本語学習者と母語話者の接触場面（林 2005）を収録して、日本語学習者の上下関係に応じたスピーチレベル使用の母語話者との比較を行った。この種の研究として、中国人または台湾人日本語学習者の接触場面と母語場面を比較した研究（陳 2003, 2004, 伊集院 2004）がある。このような比較を行う研究は、学習者の発話の特徴や問題点を明らかにしようとするものが多く、日本語教育のために有意義だと考えられる。しかし、学習者の言語行動の特徴や問題点解明には、母語話者の言語行動が明らかにされていることが不可欠だと考えられる。陳（2003, 2004）の研究は、陳（2003）の母語話者の分析をもとに、陳（2004）の母語話者・学習者の比較を行う、という段階を踏んでいる。母語話者・学習者の比較を行う場合は、陳（2003, 2004）のといったような段階を踏んで研究を進めることが必要になると筆者も考える。

5. まとめ

日本語談話のスピーチレベルを扱う先行研究について、用語・スピーチレベルの分類・データの観点から概観してきたが、今後の日本語会話のスピーチレベルを研究において重要と思われる点を以下にまとめる。

第一に課題として挙げられるのは、先行研究で使用された用語の整理と、その研究で使用する用語の明確な定義である。本稿で概観しただけでも、言語形式の丁寧度について指す用語は、8種類あり、その定義や使われ方も一定ではない。先行研究で使用されている用語の定義について整理し、それぞれの用語の意味を把握した上で、自身の研究に適した用語を選択する必要

がある。また、各研究が、用語をどのような定義で使用するか明示化しておくことも、今後の研究発展のために重要である。

第二に課題となるのは、スピーチレベルの分類の精緻化である。スピーチレベルの分類に関しては、敬体・常体のどちらでもない分類（No-Marker や中途終了型発話など）、狭義の敬語や軽卑語といった語彙レベルの丁寧度、終助詞の付加、の3つの現象が研究間で扱いの異なる現象として挙げられた。また、これらの観点を分類に含めることは、スピーチレベルの記述に有意義だと考察した。しかし、分類を細かくしすぎることから生まれる弊害（三牧 1996）にも留意する必要がある。研究目的に照らして、どの観点が重要となるかを検討していくことが重要である。

第三に重要なのは、研究目的に適したデータの選択である。スピーチレベルのどのような側面を解明しようとするかによって、使用するデータを選択していく必要がある。スピーチレベルが実際の会話においてどのように使用されているのかの実態を解明するためには、会話の内容や展開が事前に固定されていない準自然会話がデータとして最も適していると筆者は考える。

第四に、準自然会話を扱う研究においてあまり扱われていない要因についての解明が課題として挙げられる。具体的に述べると、本稿で挙げた先行研究では、上下関係の要因に注目するものが多く、親疎関係の要因についてはあまり解明が進んでいない。また、教室談話や、3者以上の参加者がいる会話なども扱われる例が少ない。スピーチレベルの全体像解明のためには、より多様な準自然会話をデータとした研究が必要となるだろう。

本稿は、スピーチレベルを扱った研究における用語の定義や分析方法など、研究の前提となる事象について概観し、スピーチレベルを扱う研究の前段階として考慮すべき課題は何かを考察した。さらに、スピーチレベルがどのような観点から分析され、どのような機能を担うものとして捉えられてきたかなど、内容面により深く踏み込んだ考察も行っていく必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

- 足立さゆり（1995）「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」、『拓殖大学日本語紀要』5: 73-87, 拓殖大学留学生別科.
- 李吉鎔（2003）「フォーマルな談話での非デスマス形式の切換え—日本語母語話者と中間言語話者の比較—」、『阪大社会言語学研究ノート』5: 79-96, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学講座.
- 生田少子, 井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」、『言語』12/12: 77-84, 大修館書店.
- 伊集院郁子（2004）「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」、『社会言語科学』6/2: 12-26, 社会言語科学会.
- 上仲淳（2005）「テレビドラマの登場人物にみるスピーチレベルの様相」、『姫路独協大学外国語学部紀要』18: 291-310, 姫路獨協大学外国語学部.
- 上仲淳（2007）「中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準」、『大阪大学言語文化学』16: 141-154, 大阪大学言語文化学会.

- 宇佐美まゆみ (1998) 「ディスコース・ポライトネス・ストラテジーとしてのスピーチレベル・シフト」, 『平成 10 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 110-115, 日本語教育学会.
- 宇佐美まゆみ (2001) 「「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—」, 『語学研究所論集』 6: 1-29, 東京外国語大学語学研究所.
- 江口英子 (1999) 「調査報告 ティーチャー・トークにおける談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」, 『日本語教育』 102: 60-67, 日本語教育学会.
- 大津友美 (2004) 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス—「遊び」としての対立行動に注目して—」, 『社会言語科学』 6/2: 44-53, 社会言語科学会.
- 大津友美 (2007) 「会話における冗談のコミュニケーション特徴—スタイルシフトによる冗談の場合」, 『社会言語科学』 10/1: 45-55, 社会言語科学会.
- 大浜るい子, 鈴木雅恵, 多田美有紀 (1998) 「自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象」, 『教育学研究紀要』 44 (第 2 部): 389-397, 中国四国教育学会.
- 岡野喜美子 (2000) 「留学生の待遇表現使用—発話調査の結果から—」, 『早稲田大学 日本語教育センター紀要』 13: 1-13, 早稲田大学日本語研究教育センター.
- 岡部悦子 (2003) 「高校生・交換留学生のスピーチレベルシフト—女子学生の課題解決場面を例として—」, 『長崎外大論叢』 6: 23-34, 長崎外国語大学・長崎外国語短期大学.
- 岡部悦子, 蒲谷宏 (2000) 「日本語学習者の口頭発表場面におけるスピーチレベルについて」, 『講座日本語教育』 36: 111-134, 早稲田大学語学教育研究所.
- 岡本能里子 (1997) 「教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け—」, 『日本語学』 5月号: 39-51, 明治書院.
- 金珍娥 (2002) 「日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト」, 『朝鮮学報』 183: 51-91, 朝鮮學會.
- 佐藤勢紀子, 福島悦子 (1998) 「日本語学習者と母語話者における発話松表現の待遇レベル認識の違い」, 『東北大学留学生センター紀要』 4: 31-40, 東北大学留学生センター.
- 申媛善 (2007) 「日本語と韓国語における文末スタイル変化の仕組み—時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して—」, 『日本語科学』 22: 173-195, 国書刊行会.
- 谷口まや (2004a) 「日本語教材におけるスピーチ・レベル・シフトの取扱いについて」, 『AJALT 日本語研究誌』 2: 35-51, 国際日本語普及協会.
- 谷口まや (2004b) 「日本語の講演の談話におけるスピーチ・レベル・シフトの形態と機能」, 『早稲田大学 日本語教育研究』 4: 117-129, 早稲田大学大学院日本語教育研究科.
- 鄭賢貞 (2004) 「日本語と韓国語の談話におけるスピーチレベルシフト」, 『日本語教育と異文化理解』 3: 35-43, 愛知教育大学国際教育学会.
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」, 『日本語科学』 14: 7-28, 国立国語研究所.
- 陳文敏 (2004) 「台湾人上級日本語学習者の初対面接触会話におけるスピーチレベル・シフト—日本語母語話者同士による会話との比較—」, 『日本語教育論集』 20: 18-33, 国立国語研究所日本語教育センター.
- 内藤真理子 (2003) 「あいづちのスピーチレベルとそのシフトについて: 日本語母語話者と韓国人学習者

- の相違」, 『世界の日本語教育』 13: 109-125, 国際交流基金日本語国際センター.
- 永井涼子 (2007) 「看護師による「申し送り」会話の談話交替管理—スタイルシフトを中心に—」, 『日本語教育』 135: 80-89, 日本語教育学会.
- 橋本拓郎 (2006) 「日本人学生の初対面会話におけるスピーチレベルの機能: 中間的なスピーチレベルの分析を基に」, 『言語と文明』 4: 77-102, 麗澤大学大学院言語教育研究科.
- 日高水穂, 伊藤美樹子 (2007) 「スピーチレベルシフトの表現効果—シナリオ「12人の優しい日本人」を題材に—」, 『秋田大学教育文化学部研究紀要. 人文科学・社会科学』 62: 1-12, 秋田大学.
- 前田理佳子 (1999) 「在日コリアン一世の談話におけるスタイル切り替え—スピーチレベルシフトの様式に着目して—」, 『待兼山論叢』 33 (日本語学): 33-48, 大阪大学文学部.
- 三牧陽子 (1989) 「待遇レベル・シフトの談話分析」, 『AKP 紀要』 3: 34-50, AKP 同志社留学生センター.
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」, 『大阪教育大学紀要』 第 I 部門 42/1: 39-51, 大阪教育大学.
- 三牧陽子 (1996) 「待遇レベルシフト」, 『言語探求の領域—小泉保博士古希記念論文集』 437-445, 大学書林.
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」, 『社会言語科学』 5/1: 56-74, 社会言語科学学会.
- 宮武かおり (2007a) 「日本人友人間の会話におけるポライトネス・ストラテジー—スピーチレベルに着目して—」東京外国語大学大学院地域文化研究科平成 18 年度修士論文
- 宮武かおり (2007b) 「日本人友人間の会話におけるスピーチレベルの使用実態」, 『TUFUS 言語教育学論集』 2: 19-31, 東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学講座.
- 百武尚子, 吉川裕子 (1999) 「待遇表現に関する実態調査 (その 2) 九大内事例に基づいた分析と考察」, 『九州大学留学生センター紀要』 10: 1-16, 九州大学留学生センター.
- 森勇樹 (2005) 「談話におけるスピーチレベルシフト—中国人日本語学習者と日本語母語話者の談話資料の比較から—」, 『語文と教育』 19: 43-56 (142-129), 鳴門教育大学国語教育学会.
- 山口和代 (2002) 「ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知—中国人ならびに台湾人留学生と日本人母語話者との比較の視点から—」, 『社会言語科学』 5/1: 75-84, 社会言語科学学会.
- 横須賀柳子 (1999) 「授業場面における教師のスピーチ・スタイル」, 『ICU 日本語教育研究センター紀要』 9: 61-76, 国際基督教大学日本語教育研究センター.
- 林君玲 (2005) 「台湾人学習者の初対面日本語会話におけるスピーチレベルの使用実態」, 『言語情報学研究報告 6—自然会話分析と会話教育—総合的モジュール作成への模索—』 261-280, 宇佐美まゆみ (編) 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」.
- Cook, Haruko, Minegishi (1998) “Situational meaning of the Japanese social deixis: The mixed use of the masu and plain forms”, *Journal of Linguistic Anthropology* 8/1: 87-110.
- Cook, Haruko, Minegishi (2006) “Japanese Politeness as an International Achievement: Academic Consultation Sessions in Japanese Universities” *Multilingua* 25: 269-292.
- Ikuta, Shoko (1983) “Speech Level Shift and Conversational Strategy in Japanese Discourse”, *Language Sciences* 5/1: 37-53.
- Okamoto, Shigeko (1999) “Situating Politeness: Manipulating Honorific and Non-Honorific

- Expressions in Japanese Conversations”, *Pragmatics* 9/1: 51–74.
- Siegal, Meryl and Okamoto, Shigeko (2003) “Toward reconceptualizing the teaching and learning of gendered speech styles in Japanese as a foreign language Japanese”, *Language and Literature* 37/1: 49–66.
- Usami, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a universal Theory of Politeness*. Hituzi Syobo.